

2017年6月20日の関西医事新報に 当院の医師が掲載されました

2017年6月20日(毎月1回20日発行)

関西医事新報

大阪 12

地域の患者は地域で診る

医療法人讃和会 友愛会病院 寺本 佳史 副院長



【寺本 佳史】近畿大学付属和歌山高校卒業 1992 近畿大学医学部卒業
同脳神経外科入局 2007 同附属病院脳神経外科講師 2012 リンくう総合医療
センター脳血管外科部長兼リハビリテーション副センター長 2013 友愛会病院
2016 同副院長

◎脳神経外科医と
整形外科医が常駐
当院の強みの一つは脳
神経外科医が常駐してい
ることです。昼夜を問わ
ず、検査、開頭手術、脳血
管内手術などに対応。超
急性期の治療を得意とし
ています。

◎救急隊との取り組み
昨年度の救急車による
搬入件数は年間約36



血管内治療が行われている手術室

大阪市南西部地域の救
急医療を支える友愛会病
院。昨年就任した寺本佳
史副院長は、脳神経外科
医として脳血管内治療に
取り組みながら、術後リ
ハビリテーションにも力
を注ぐ。同院を「地域の
中核病院にしたい」と奔
走する寺本副院長の思い
とは…。

整形外科も特徴です。
整形外科医は5人体制
で2016年度に実施
した手術は603件。う
ち人工骨頭や骨折観血的
手術が半数以上を占めて
います。

50件。こちらは年々増
加傾向です。

脳外科疾患、特に脳卒
中や外傷の場合は、早期
搬送、早期治療開始が欠
かせません。そこで当院
では2014年から、連
携強化を目的に、地元の
救急隊との意見交換会を
年に3〜4回のペースで
開くようになりました。

◎内から外への転換
当院に赴任したとき、こ
の病院が、地域の中で孤立
しているような印象を持
ちました。医師会の先生
方との交流が少なく、紹
介率も低かったからです。
そこで私は、周辺の医
療機関に着任のあいさつ
に行くことにしました。

「救急、脳神経外科、整形
外科の患者さんは、当院
で受け入れます。それ以
外の患者さんは、よろし
くお願いします」と、広
報して回ったのです。

今の時代、待っているだ
けでは患者さんは来てく
れません。当院の診療の
特徴、力を入れてること
などを知っていただくか
ないと、患者さん選ばれ
ず、開業医の先生方から
紹介もしてもらえないの
です。

2014年からは、開
業医の先生方向けに脳神
経外科疾患の研究会を年
に2度開催しています。



リハビリテーション室

◎地域で、最後まで
救急で運ばれてきた脳
卒中や骨折の患者さんに
は、術後すぐの段階から
急性期リハビリを開始。
必要に応じて回復期リハ
ビリテーション病棟(42
床)に移っていただき、在
宅復帰を目指します。

医師、看護師、PT(理
学療法士)、OT(作業療
法士)、ST(言語聴覚士)、
医療ソーシャルワーカー
などが連携して治療に当
たっています。重症の患者
さんも多い中、在宅復帰
率は90%強です。

私は、医師になつたばか
りのころ、退院後の患者
さんがどうなっているか
まで思いが至らず、脳卒
中の患者さんなどのリハ
ビリの重要性にも、目が
向いていませんでした。

しかし、ある時、急性期
病院の脳外科医は、脳卒
中治療の一部を担っている
だけということに気づい
たのです。

手術や血管内治療をす

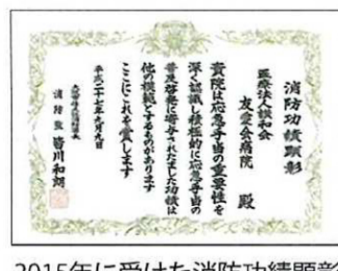
現状の報告や今後の課
題を話し合うことで、強
固な関係を構築してきま
した。また、2015年度
からは、症例報告検討会
の開催や救急同乗実習を
開始するなど、救急隊員
と医師、看護師間の連携
強化にも努めています。

救急隊の方から出た
「救急車の受け入れ台数
が少ない」「病院からの質
問項目が多く、時間がか
かりすぎる」といった課題
を一つずつ解決すること
で、スムーズに受け入れ
られる体制を築きつつあ
ると実感しています。

最近では、脳卒中を発
症した患者さんを搬送す
る際、救急隊に「友愛会病
院に運んでほしい」と希
望する人が増えてきたと
も聞き、うれしく思ってい
ます。

また、来月には地域の婦
人会を対象に「脳梗塞を
テーマにした健康講座を
開きます。
わざわざ遠くの医療機
関を受診しなくても、当
院に来ていただければ質
の高い医療を提供できる
ということを、地域の医
療機関、住民の皆さんに
アピールしていきたいと
考えています。

医療法人讃和会 友愛会病院
大阪市住之江区浜口西3-5-10
☎06-6672-3121(代表)
http://www.sanwakai.jp/



2015年に受けた消防功績顕彰

私が大事にしたいと
思っているのは、地域の患
者さんは地域で診ること
いうこと。そのため、体
制を整えていく時期にき
ていきます。

国の方針で在宅移行が
進んでいます。今後は訪
問看護の充実や法人内に
老人保健施設を設置する
など、患者さんを最後の
瞬間まで診ることができ
る仕組みを作りたいと考
えています。

「患者さんを最後まで
診たい」という気持ち
強くなった私は4年前
リハビリ科専門医の資格
を取りました。